Tennessee Williams の *The Municipal Abattoir*
──独裁者は誰か──

落　合　和　昭

序：劇の「背景」、「題名」、その特殊性

Tennessee Williams（1911-83）の一幕劇 *The Municipal Abattoir*、『市営食肉処理場』の初演は、2004 年 4 月 22 日、Washington D.C. の Kennedy Center で、Shakespeare Theatre によって行われた。演出は、ワシントン D.C. のシェイクスピア劇場の芸術監督である Michael Kahn が担当した。

Mister Paradise and Other One-Act Plays の巻末に付けられた Note on the Text の中にある Notes to the Individual Plays の *The Municipal Abattoir*[(1)] の項に、

> Williams seems to have been revising *The Municipal Abattoir* in 1966, when this title was included ─ along with that of *The Two-Character Play* ─ on a list of titles for possible inclusion in the volume *Dragon Country and Other Plays*. (Both entries were then crossed out, with a notion: "TW still working on.") The list, written in Williams's hand and dated March 11, 1966, survives in the files at New Directions. (p237)
>
> （下線は引用者）

ウィリアムズは、1966 年に『市営食肉処理場』を書き直していたように見えるが、そのとき、この題名は、『二人芝居』とともに、『ドラゴン国とその他の劇』の巻に収められる予定の一連の題名に含まれていた（この 2 つ劇は、「ウィリアムズがまだ執筆中」という意見が添えられて、取り消された）。ウ

イリアムズの手で書かれ、1966 年 3 月 11 日の日付が付いているリストは、ニュー・ダイレクションズ版のファイルに残っている。

（下線は引用者）

と書かれているように、この劇は、1966 年に書かれたと考えてよいだろう。1966 年と言えば、Williams が 55 歳のときであり、アメリカでは、ヴェトナム戦争（1960-75）の激化に伴って、各地で反戦デモが拡大し、Los Angeles の Watts 地区では、黒人による暴動も起きた時期であった。その前後の、1963 年から 1968 年の 5 年間には、1963 年に、John F. Kennedy（1917-63）、1965 年には、Malcolm X（1925-65）、1968 年には、Robert Kennedy（1912-68）と Martin Luther King, Jr.（1929-68）が、相次いで暗殺された時代であり、この劇は、その渦中とも言える、1966 年に書かれている。当然のことながら、Williams も、また、その時代の、政治的、社会的混乱、及び、暗殺等の暴力が我が物顔に大手を振っていた現状を目の当たりに見ていた。このような時代の政治的、社会的背景と、この劇とは、その内容からしても、無関係だとは言えないだろう。

まず、この *The Municipal Abattoir*、『市営食肉処理場』という「題名」について、触れておきたいことが 3 つある。

その 1 つは、この「題名」の中の、“abattoir” という語である。この語は、「食肉処理場」・「屠殺場」を意味する。この語を、いくつか手元にある辞書を引いたところ、元々、フランス語で、19 世紀の初め頃に、英語に外来語として入ったと記してあった。この語に当たる英語は、‘slaughterhouse’ である。Williams は、「題名」に、英語にある ‘slaughterhouse’ ではなく、フランス語からの外来語である ‘abattoir’ を用いている。「題名」としての、The Municipal Abattoir と The Municipal Slaughterhouse を比較した場合、外来語である ‘abattoir’ を用いるほうが、英語の ‘slaughterhouse’ よりも、その意味は和らげられる。「食肉処理場」・「屠殺場」は、家畜を殺して、その肉を処理する場所という、ある人にとっては、動物に対する残酷性を暗示する言葉であり、たとえ、それが食肉のためとはい

え、動物に対する暴力を連想させる。そのため、それを外来語で表せば、その分、その残酷性を軽減できることは確かであろう。

2つめは、「題名」、*The Municipal Abattoir* の中の、“municipal” という語である。この語は、「市の」、「市営の」を意味する形容詞であるが、“abattoir” とともに使用されると、どこか相性が悪く、何か不気味なニュアンスが加わってくる感じがする。というのは、“municipal” の意味は、「市の」、「市営の」であるので、当然のことながら、私的なものではなく、公的な意味が伴う。この「市の」、「市営の」が「食肉処理場」・「屠殺場」と結びつくと、公的な「食肉処理場」・「屠殺場」、「市営食肉処理場」の意味になる。そうすると、この「食肉処理場」の背後に、何やら、公的で、強権的な権力の介在を予感させる。

3つめは、この2つめと関係があるが、この劇の「場所」が、ある軍事独裁国家であることを考えると、この「市営食肉処理場」は、家畜の食肉処理場ではなく、人間の食肉処理場ではないかという連想を抱かせる。それは、さらには、「市営食肉処理場」＋「軍事独裁国家」という図式が、ナチとアウシュビッツ等のユダヤ人収容所、「ナチ」＋「ユダヤ人収容所」＝ユダヤ人虐殺という図式を連想するのは、筆者だけだろうか。

Williams の一幕劇集、*Mister Paradise and Other One-Act Plays*（この拙論のテキストとして使用）の巻末に付けられた Note on the Text の Notes to the Individual Plays (p229) には、

> We have made the incidental and substantive emendations enumerated in the preceding two paragraphs silently. Our copy-texts for these plays are, in any event, available to the scrutiny of scholars and prospective directors, since they are held in publicly accessible archives (with the exception of the surviving draft of *The Municipal Abattoir*)

私たちは、先に述べた2つのパラグラフで挙げられている、付帯的で、本

質的な修正を暗黙のうちに行った。これらの劇のコピー・テキストは、いずれにしても、学者やこれから演出をしようとしている演出家の吟味にさらされる。というのは、それらの劇は公に見ることができる保管所に所蔵されているからである（ただし、『市営食肉処理場』の現存する草稿を除く）。

と書かれている。このことは、原稿に、明らかなタイプミス、誤字脱字等がある場合は、編者の手が加えられる可能性があることを意味している。この一幕劇集には、計 13 編が収められているが、その中で、この『市営食肉処理場』だけは、学者や演出家の吟味を経る機会が与えられていないこと、すなわち、何も手が加えられず、Williams がタイプした原稿のままの形で、この一幕劇集に収められていることを意味している（また、上の引用文の “the preceding two paragraphs”、「先に述べた 2 つのパラグラフ」とは、*And Tell Sad Stories of Deaths of Queens...* と *Adam and Eve on a Ferry* の中の、それぞれ、1 つのパラグラフを指す）。

この一幕劇、『市営食肉処理場』だけが、何故、そのような形で、すなわち、編者や演出家による吟味を経ずに、出版されたかという理由については、同じ *Mister Paradise and Other One-Act Plays* の巻末に付けられた Note on the Text の Notes to the Individual Plays の中の *The Municipal Abattoir* の項には、

> Our copy-text—the only text of this play that we know to be extant—is currently in the possession of Michael Kahn, Artistic Director of the Shakespeare Theatre in Washington, D.C. Kahn received the script from Lee Hoiby, to whom Williams gave the play after Hoiby worked on the operatic version of *Summer and Smoke*.（p237）
>
> （下線は引用者）

このテキストは、現存する、この劇の知られている唯一のテキストは、現在、ワシントン D.C. のシェイクスピア劇場の芸術監督であるマイケル・カーンの所有である。カーンはそれをリー・ホイビィから受け取った。ウィリアム

ズは、ホイビィが『夏と煙』のオペラ版に従事した後に、彼に譲り渡した。

（下線は引用者）

と書かれている。下線部にもあるように、『市営食肉処理場』の原稿はワシントン D.C. のシェイクスピア劇場の芸術監督であるマイケル・カーンの個人所有であるため、この原稿には、彼の意向もあって、編者が手を加えることができなかったのかもしれない。また、カーンが、この劇の初演の演出を担当しているのも、この一幕劇の原稿が、彼の個人所有であることが、その大きな理由であると思われる。

大学生、BOY と GIRL

この一幕劇の冒頭は、次の「ト書き」で始まる。

The pavement of a city street; the street itself is invisible. Behind the pavement is a wall of gray concrete over which are pasted poster-photographs of a military dictator, and at the bottom of the posters the word "Viva!" It is summer dusk. A boy and girl, university students, walk along the pavement, the girl crying, the boy carrying a furled flag. In the distance, the band music of a parade: it stays at a low level till near the end of the play. (p159)

（下線は引用者）

市道の歩道、通り自体は見えない。歩道の後ろには、灰色のコンクリートの壁があり、その上には、軍事独裁者のポスター写真が何枚も貼ってある。ポスターの下には、「万歳」と書かれている。夏の夕暮れ。大学生の男女、女は泣きながら、男は巻き上げた旗を持って、歩道を歩いている。遠くで、パレードの楽団の音楽が聞こえる。それは、低い音で、劇の終わりまで聞こえてくる。

（下線は引用者）

上の “poster-photographs of a military dictator”、「軍事独裁者のポスター写真」、“Viva”、「万歳」、男子学生が持っている、“furled flag”、「巻き上げられた旗」（国旗であろうか）、“the band music of a parade”、「パレードの楽団の音楽」（おそらく、軍隊の楽団）は、この国が、軍事独裁者によって支配されている国であることを暗示していると考えてよいだろう。この劇の「場所」とされている国は、Williams のイメージの中では、ある程度、モデルにした国はあるかもしれないが、この劇の中では、特定されていないので、架空の国と考えてよいだろう。また、「時間」も、ただ、夏の夕暮れと書かれているだけで、何年の夏であるかは、明らかにされていない。すなわち、Williams は、この劇では、明白な形では、劇の「場所」や「時間」を特定していない。ただ、特定しているのは、ある国の、ある町の市道であり、ある年の夏の夕暮れ時であることだけである。

この劇では、夏の夕暮れ、2 人の大学生の男女が、人通りのない歩道を歩いている。男は手に巻き上げた旗を持ち、女は泣いている。この時点で、この劇の冒頭の「台詞」が始まる。

GIRL [*as the boy stops*]: Is this where?
BOY: Yes. Go away now. You're making us conspicuous.
GIRL: Can't you stay back of the wall?
BOY: Of course not. I have to run into the street to make sure I don't miss. [*He gives her a quick, hard kiss*.] Now go away.
GIRL: It didn't have to be you!
BOY: Stop that!
GIRL: It could've been someone older, someone sick or ugly!
BOY [*stripping off his wrist watch and ring*]: Take these. Now go. There's a man looking at us. Cross through the park at the next corner. Go! (p159)

若い女「男が足を止めると」：ここなの？

若い男：そうだ。もう行けよ。おまえがいると目立つから。

若い女：壁の後ろに隠れないの？

若い男：し損じないように、通りに走り出なければならないから。「彼は彼女に素早く、強くキスをする。」さあ行けよ。

若い女：あなたである必要はなかったでしょう。

若い男：それは言うな。

若い女：もっと年上の人、病気の人か、醜い人ではいけなかったの？

若い男「腕時計と指輪を外しながら」：これを持って行け。さあ行け。俺たちを見ている男がいる。次の角で、公園をつきって行け。行け！

2 人は、人目につくことを恐れながら、極度に警戒しているように見える、この若い男は、密かに、何か重要な任務、しかも、死を伴うような任務を背負って、今、その現場に到着したと思われる。彼は、腕時計や指輪を彼女に渡しているが、それは、彼が任務中に死んだ場合の、彼の形見として持っているようにという意味であるかもしれない。彼もすでに死の覚悟を決めているようである。また、冒頭の「ト書き」(「遠くで、パレードの楽団の音楽が聞こえる」) や、若い男の「台詞」(「し損じないように、通りに走り出なければならないから。」) から、彼の任務は、壁に貼られている軍事独裁者の写真でも暗示されているように、軍事パレードに参加していると思われる、軍事独裁者を暗殺することであるかもしれないと推測される。彼が、国旗と思われる、「巻き上げた旗」を手に持っているということは、彼が、これから遂行しようとしている任務は、個人的な利益のためではなく、国家のためであるという証のためであるかもしれない。彼女は、彼の恋人らしく、この任務をしなければならないのは、何故彼でなくてはいけないのか、何故他の人でなければならないのかと彼に詰問して、彼に迫り来る死を予感してか、不安を隠しきれないでいる。彼女が泣いていたのは、おそらく、彼がもう生きては帰ってこないと思っているためだろう。このような状況下に置かれている 2 人を描いているので、この書き出しには、最初から、一種の緊迫感が漂っている。

次の「ト書き」、

He kicks at her feet: She runs off, sobbing. After a moment or two a middle-aged clerk appears on the walk and stops by the student.（p159）

彼は彼女の足をける。彼女は、泣きながら走り去る。しばらくすると、一人の中年の男が歩道に現れ、学生のそばで立ち止まる。

にあるように、大学生の男が、むりやり、彼女を追い返して、彼女と別れるとすぐ、3 人目の「登場人物」である、中年の職員がどこからともなく現れる。これで、この一幕劇の全員の「登場人物」が登場したことになる。しかし、ここでも、この第 3 の「登場人物」については、“a middle-aged clerk”、「中年の職員」と書かれているだけで、名前や身体的特徴等については、何も書かれていない。劇の「登場人物」欄にも、

BOY
GIRL
CLERK

と書かれているだけである。冒頭の「ト書き」でも、BOY と GIRL については、“university students”、「大学生」と書かれているだけで、名前や身体的特徴等につては、何も書かれていない。Williams が、この劇では、「登場人物」に名前を与えていないだけではなく、彼らについては、最小限の情報しか与えていない。

この中年の職員は、若い大学生の男に話しかけて、きわめて丁寧な口調で、

CLERK: Would you be, could you be, kind enough to direct me to the Municipal Abattoir?（p160）

職員：市営食肉処理場へ行く道を教えていただけないでしょうか。

と尋ねる。「市営食肉処理場」という、この劇の「題名」に使われている言葉が、ここで初めて出てくる。大学生が彼にそこで働いているのかと尋ねると、その職員は、

CLERK: Oh, no, oh, no, I'm—I mean I was still yesterday a clerk in the Office of National Economy, but I was discharged and today I was condemned.（p160）

職員：いや、違うんです、私は昨日まで国家経済局の職員でしたが、私は解雇され、今日、有罪の判決を受けた。

と答える。彼は、国家経済局の職員であったが、突然、解雇され、翌日には、有罪の判決を受け、市営食肉処理場へ行くように指示されたのである。彼は、解雇された翌日に、有罪判決を受けるとは、あまりにも処分の仕方が拙速すぎる感じがする。この拙速さの背後には、国家による、強権の性急な行使が行われていると考えられる。大学生が、なんで有罪の判決を受けたのか尋ねると、その職員は、この劇の中では、最も長い「台詞」の中で、その理由らしきことを語り始める。国家経済局の職員であった彼が解雇され、翌日、有罪判決を受け、市営食肉処理場への移動を命じられるにしては、彼が述べる理由は、きわめて奇妙な理由である。

CLERK: There are several possible reasons. I did something foolish last week. I passed a tobacco shop and in the window of the shop was a wire contraption, a, a, a — treadmill, a wire cage that turned. It had a small animal in it, a squirrel, something like that, or a chipmunk, something like that, and it was running and running and running in the wire cage, treadmill, and it looked — frightened, It looked panicky to me, so I was very foolish, I went in the shop and spoke to the proprietor about the little animal

in the turning wire cage. I asked if the creature ever got out of the treadmill or had to keep running in it all the time and the man in the shop, proprietor of the shop, flew into awful rage over my questions, he caught hold of me by my coat and jerked my wallet out of my pocket and took down my name and address and place of my employment and said he was going to have me condemned for interfering with something that wasn't my business. I think he must have done that since I've been ordered to the Municipal Abattoir. But there's another possible reason I've been sent there. When my daughter was drafted into the Municipal Whorehouse, I — I made, I wrote an appeal to the . . . (p160)

職員：おそらくいくつかの理由がある。先週、私は馬鹿なことをしてしまった。私はあるタバコ店の前を通りかかったら、そのショーウインドウには、ワイヤーでできた奇妙な仕掛け、あの（ハツカネズミなどが回す）回転ドラム、回るワイヤーのカゴがあった。それには小さな動物、リスか何か、また、シマリスか何かが乗っていて、それがワイヤーのカゴ、回転ドラムの中で、走りに走っていた。それは怯えているように見え、私には、それはパニックに落ちいっているように見えた。私はあまりにも馬鹿だった。私は店に入って、回転している、ワイヤーのカゴの中にいる、小さな動物について、店主に話した。私は、あの動物は回転ドラムから出たことがあるか、あの動物は、ずっと、あの中で走り続けなければならないのか尋ねた。店の人、店の店主は、私の質問にえらく怒り、私のコートをつかみ、ポケットから財布を取り出し、私の名前、住所、勤め先を書きとめ、自分には関係ないことに首を突っ込んだかどで、有罪にしてやると言った。私は、市営食肉処理場へ行くように命令されているので、彼がそうしたにちがいないと思っている。でも、私が送られたのは、別の理由があるのかもしれない。私の娘が市営売春宿へ行くように選ばれたとき、私は要請書を書いたんです、、、

職員の、この「台詞」、“There are several possible reasons.” の中の “possible” と

いう語は、彼が、何故解雇され、その上、何故有罪判決まで受けなければならなかったか、彼自身、はっきりとわかっていないので、その理由については、推量の域をでないと思っているようである（このエピソードは、Franz Kafka（1883-19249）の『審判』（1914）を思い出させる）。また、回転ドラムの中で走っている動物について尋ねただけで、店主が、自分には関係ないことに干渉していると、激怒して騒ぎ立てるのは、いささか仰々しすぎる嫌いもある。この店主が、他人に関する干渉であると言って、これほどまでに激怒する理由を強いて挙げれば、この国では、回転ドラムの中で、闇雲に、絶えず、走り続けているだけの動物は、この国の国民が置かれている状況を暗示しているので（このエピソードも、Kafka の『変身』（1915）を思い出させる）、このことについて質問するのは、国の方針に口を出すことであるとでも言いたいのだろうか。それとも、この国では、自分には直接関係ないことで質問することは、いかなる場合も、決して許されることではないとも考えられているのだろうか。この出来事は、何らかの形で、このような店にまで、軍事国家の権力の行使が行き渡っていることを示しているのだろうか。それに加えて、彼は、この長い「台詞」の終わりに、彼の娘は、“Municipal Whorehouse”、「市営売春宿」へ送られたとも言っている。このとき、Williams は、彼の娘が、“drafted”、「徴兵された」という、軍事用語を使っている。これは、もちろん、通常、軍人として徴兵されるという意味で使われる語である。しかし、ここでは、彼の娘が徴収されて、「市営売春宿」に送られているので、この娘も、軍人と同様に、公的に徴兵されて、いわば、お国のために、市営売春宿で働かされていると考えられる。これらのことが行われているということは、この国では、公然と、人権無視が行われていると言われてもしかたがないだろう。この職員の話には、不条理感が漂っている。また、この長い「台詞」の中には、一つだけ不可解なことがある。職員は、先週の出来事として、「私は、市営食肉処理場へ行くように命令されているので、彼がそうしたにちがいないと思っている。」と言っているが、彼が市営食肉処理場へ行くように命令されたのは、今日であるので、彼の言っていることには整合性がない。

この話を聞いた大学生は、職員に、これは、誰かが仕掛けた罠であるにちがいない、さもなければ、彼をすぐに逮捕して、トラックで、「市営食肉処理場」へつれて行かれるはずであると言うと、職員は、今では、必ずしも、この国はそのようなことはしないが、ときどき、ある時間に、「市営食肉処理場」へ行くように指示されると言う。しかし、そこへ遅れて行けば、より厳しい罰が待っている。彼らはすぐには見逃してくれないと答える。これに対して、大学生は、市営食肉処理場へは行かないで、次の通りで、市電に乗り、できるだけ、遠くへ逃げろと言って、彼に逃亡を促す。この時点では、大学生は、この職員のことを心配して、彼を、一刻も早く、安全なところへ逃がそうとしているように見える。

このような会話が続く中で、ある考えが浮かんだのか、大学生は、突然、話題を変え、職員に、猟へ行ったことがあるか、銃は持っているか、銃の使い方を知っているか、至近距離で銃で正確に狙いを定めることができるかと、少し場違いのような質問を矢継ぎ早に始める。このような質問をした後、大学生は、突然、このような質問ばかりをし続けるのはまずいと思ったのか、また、急に、職員の逃亡に話を戻して、気をしっかりと持って、できるだけ市営食肉処理場から離れるようにと勧める。ここで見えてくるのは、大学生は、この職員を、あることに利用しようという考えが浮かんだのだろう。しかも、銃を使う何かに。銃を使うと言えば、この劇では、おそらく、それは、軍事国家の独裁者の暗殺を暗示していることになるだろう。しかし、その一方で、この職員を、いわば、暗殺の道具として使うのは、忍びないという思いがあるのか、彼は、再び、思い返して、職員に「市営食肉処理場」へ行くように勧めている。ここでは、彼の考えが、2つの選択の間で、大きく揺れ動いているのが感じられる。

これに対して、職員は、あまりにも長いこと、市の公務員として働いてきているので、権威ある人から、何かをするように言われたら、それに疑問を差し挟むことなく、それを実行する人間になっていると答える。このときの、彼の「台詞」は、

CLERK: ....As for me, when I'm told to do something by someone in authority, I do it without a question.（p162）

職員：、、、私としては、権威ある人に、何かを言われたとき、質問なしにそれをする。

（点線部分は省略部分）

となっている。すると、大学生は、そのような考えでいると、最後には、身体をすりつぶす機械で刻まれて、缶詰にされ、みんなに食べられることになると言って、脅しにかかる（おそらく、「市営食肉処理場」では、有罪と見なされた人は、そのようにされるという噂でもあるのかもしれない、しかし、それが事実である可能性もありうる）。大学生の、逃亡するようにという再三の勧めにもかかわらず、職員は、どうしても逃げ出すことはできない、「市営食肉処理場」へ行かなければならないと言い張る。これに対して、大学生は、

BOY: Hell, go there, go there, if you've lost the power to choose anything for yourself. But I'll tell you something. Hear the procession coming?（p163）

若い男：畜生、そこへ行けよ、そこへ行けよ、もし自分で選択する力がないなら。でもいいか。行列がやってくるのが聞こえるだろ。

と言って、どうしても説得に応じない職員に愛想を尽かし、行きたければ行けと言わんばかりに突き放すが、再び、急に話題を変えて、彼らのほうへ向かってくる行列に注意を促し、続けてすぐに、次のやりとりが続く。

BOY: It's coming right by here and I'm going to interrupt it with this little instrument of interruption. Feel it in my pocket. [*He seizes the Clerk's hand and places it on his pocket*.]

CLERK: Is it—？

BOY: Yes, a revolver containing six bullets.

CLERK: No, no, no, throw it over the wall, they'll shoot you down if they —！(p163)

若い男：それは（行列）すぐにここにやってくる。俺はそれを妨害できる、この小さな道具で妨害するつもりだ。俺のポケットの中にあるものを触ってみろ。「彼は職員の手を掴んで、ポケットの上からそれに触らせる。」

職員：それは？

若い男：そうだ、6 発入っている銃だ。

職員：だめ、だめ、だめですよ。壁の向こうへ捨てなさい、撃たれますよ、そんなことすれば、

この中で、若い男は、職員にポケットの中の拳銃を触らせて、これで行列を妨害するようにと言っている。ここに至って、大学生の密かな任務は、初めて、この行列を妨害することであったことが明確になる。おそらく、大学生は、職員をこの暗殺計画に利用しようと思ったのは、職員が言った「私としては、権威ある人に、何かを言われたとき、質問なしにそれをする。」という言葉であったのかもしれない。

大学生は、言葉では、“interrupt”、「妨害する」と言っているが、単に、妨害することだけではなく、さらに進んで、その行列の中の誰かを暗殺しようとしているのか、この時点では、判断することができない。この話を聞いた職員がひどく怯えているので、大学生は、そんなに怯えているのに、よく「市営食肉処理場」へ行けると皮肉めいて言う。これに対して、職員は、

CLERL: I do what I'm told to do, I go where I'm told to go, I never question instructions.

職員：私はするように言われたことをする、私は行けと言われたところへ行

く、けして指示に疑問を差し挟まない。

ときっぱりと言う。この「台詞」は、前に引用した、彼の「私としては、権威ある人に、何かを言われたとき、質問なしにそれをする。」を思い出させる。

彼の、このような言い方を、心のどこかで、密かに待ち構えていたかのように、彼の言葉尻をとらえて、大学生は、ほとんど間髪を入れず、横柄な態度で、

BOY: Good. I will give you instructions, I'm your commander now. You are my slave. (p163)

若い男：よし。俺が指示を出そう。今では、俺がお前の司令官だ。お前は私の奴隷だ。

と言う。職員の、権威ある人から言われたことは、どんなことでもする、何も疑問も差し挟まないで、実行に移すという生き方を、即座に、利用しようと考えたのか、大学生は、この機会に乗じて、突然、豹変した態度を見せ、彼自身が、倒そうとしている軍事独裁者のような口調をとり、しかも、こともあろうに、自分を司令官呼ばわり、職員を奴隷呼ばわりし始める。大学生は、皮肉にも、彼が最も軽蔑している軍事独裁者と同じような口調や態度を取り始めている。よく言われるように、ミイラとりがミイラになったと言えるだろう。不審に思った職員は、素朴に、

CLERK: How am I your slave?
BOY: By appointment, just now.... (p164)

職員：どうして私があなたの奴隷なのか。
若い男：今、任命された、、、

というように、職員が何故彼の奴隷になるのかと疑問を呈すると、若い男は、その質問には、直接答えず、今、任命したと、まるで、彼自身が軍事独裁者であるかのように、平然と答える。大学生は、自分が出した、自分勝手な任命により、さらに、彼自身、勢いを増したかのように、彼は、職員に、

BOY: Do what I tell you to do! Take this bloody flag in one hand, this revolver in the other and make sure the flag hides the revolver which is loaded for bear. Understand me? (p164)

若い男:俺が言ったことをするんだ。片手にこの旗を持って、もう片方には、この銃を持て。旗で、準備万端整っている銃が隠れているか確かめろ。わかったか。

と、職員が取るべき行動について、指示を与える。大学生は、さら続けて、

BOY: You're going to do exactly as I say. You are my slave, I am your commander. Now, then. The procession is going to pass right by here in about a minute. The General's car is the first one behind the motorcycles. Understand me?. (p164)

若い男：俺が言う通りに、きちんとやれ。お前は俺の奴隷だ。俺はお前の司令官だ。いいか、この行列はすぐにここを通り過ぎる。将軍の車は、オートバイのすぐ後ろにいる。わかったか。

と言う。彼は、この「台詞」の中で、再び、“You are my slave, I am your commander.”、「お前は俺の奴隷だ。俺はお前の司令官だ。」と言って、相手を、自分の思い通りにさせようとしている彼は、カルト宗教のボスのようであり、彼のしていることは、一種の洗脳に近いような気もする。彼は、今や、完全に軍事独裁者になり、職員を奴隷として使っている。この変わり身の早さ。少し前までは、軍

事独裁者を暗殺しようとしていた若者。それが、今や、瞬く間に、自分自身が軍事独裁者になり、職員を奴隷として見下している。この 2 つのことは、実を言うと、同じ土俵上にあって、ただ身体の位置が入れ替わっただけであることが明らかになる。

さらに彼は、

> BOY: All right. When the first limousine is about to pass by here, you scream out "Viva, Viva!"and wave your flag, at the same time running into the street. And before you are stopped, you empty this revolver, loaded for bear, directed into the face and chest of the General, fast, fast, fast as you can. Okay, slave? Understand me? (p164)

> 若い男:よし。最初のリムジンが今にも通り過ぎから、お前は、「万歳、万歳」と叫んで、旗を振れ、同時に、通りへ走り出ろ。取り押さえられる前に、直接、将軍の顔と胸に向かって、準備万端整っている銃が空になるまで撃て、早く、早く、できるだけ早く。いいか、奴隷。わかったか。

と、彼は、職員がとるべき行動について、具体的に指示する。ここに至って初めて、やはり、それは軍事独裁者である将軍の暗殺であることが判明する。ここまでくると明らかになるのは、大学生は、最初は、職員に命じた暗殺計画を、自らの秘密の任務として行う予定であった。しかし、その遂行過程において、偶然にも、目の前に、権威ある者から言われたことには、何も疑問を差し挟まず、黙って実行する性格の持ち主である職員が現れた。これは最大の好機とばかり、彼は、この機会を利用して、この職員を彼の代わり、暗殺を遂行させようと企てる。彼の任務は、遂行中に、ほとんど確実に、自らの命も失う可能性がある。彼は自らの生命が惜しくなり、今度は、平気で、職員の生命をもてあそぼうとしている。大学生は、ここで、言われたことには、何も疑問を差し挟まず、黙って実行する性格の持ち主である職員を利用している。しかし、これ

は、軍事独裁国家の独裁者が、現にしていることに他ならないではないか。そのことを、大学生自身は、ほとんど自覚していないように思える。

彼は、

BOY: It will be quicker and easier for you than keeping your appoinment at the Municipal Abattoir and your name and picture will be on the front page of every newspaper in the world. Undestand me? (p164-p165)

若い男：市営食肉処理場での任命以上に早く、簡単であろう。あなたの名前と写真は、世界のあらゆる新聞の第一面に載るだろう。わかったか。

と、市営食肉処理場へ行くよりも簡単で、しかも、すぐに、彼が、世界中で、一番の有名人になれると言わんばかりである。さらには、

BOY: Then I'll leave you here. But remember my eyes and eyes of the whole world are on you. Accidentally, just through asking a question of someone unknown on a street, your meaningless life is elected to glory, and your death to the death of a hero. Goodbye. Embrace me [*He draws the man into his arms, thrusts him back*.] Dear slave, immortal saint, martyr, and hero! (p165)

若い男：それじゃ、お前をここに置いておく。俺の目と世界の目がお前を見ていることを忘れるな。たまたま、通りで見知らぬ人に質問をするだけで、お前の意味のない生活は栄光にまで高められ、お前の死も英雄の死まで高められる。さようなら。俺を抱きしめてくれ。「彼はその男を腕に抱きしめ、それから、身を引き離して。」奴隷よ、不死なる聖人よ。殉教者よ。英雄よ。

というように、聖人、殉教者、英雄と言って、彼を褒めそやす。そして、彼は、

すぐにその場を離れる。彼は、職員を、自分の奴隷として、自分の持ち駒として使って、平然として、その場を立ち去る。

すると、職員は、観客の方へ向かって、

CLERK [*audience*]: I wonder if you would be kind enough to direct me to the Municipal Abattoir. I don't want to be late. They make it harder for you if you don't come on time . . . .Oh. I'll write it down. Thank you!

職員「観客に」：市営食肉処理場へ行く道を教えていただけないでしょうか。私は遅れたくはないのです。時間通りに行かないと、大変なことになります。、、、書きとめます。ありがとう。

と言う。それは、この職員が、初めて、大学生に会ったときの「台詞」とほとんど同じ「台詞」である。

職員が大学生に会ったばかりのとき、「台詞」、

CLERK: Would you be, could you be, kind enough to direct me to the Municipal Abattoir? (p160)

職員：市営食肉処理場へ行く道を教えていただけないでしょうか。

と、「台詞」、

CLERK: ....And I've been told they make it harder for you if you get there late,... (p161)

職員：、、、それに、遅れて着いた場合は、彼らはより厳しい態度に出る。

（点線部分は省略部分）

を合わせたような「台詞」を、劇の最後に言う。ここに至って、初めて、この職員は、軍事政権の、いわば、スパイで、大学生の秘密の任務を引き受けることによって、無事に、暗殺計画を未遂に終わらせたことになる。結果として、騙したのは、大学生ではなく、職員であり、騙されたのは職員ではなく、大学生であることが判明する。

まとめ

この一幕劇では、軍事独裁国家の独裁者を倒して、新しい国家を樹立しようとする一群の人々の中から、大学生が選ばれて、独裁者の暗殺を命令された。彼は、暗殺計画を実行しようとしていたとき、たまたま、出会った職員（いや、後から考えると、職員は、意図的に、大学生に近づいたふしがある）を利用しようとする。しかし、大学生は、彼をうまく利用したと思っていたが、実は、大学生自身のほうが彼によって騙されていたことが判明するというドデン返しが待っている。

この中で、大学生は、独裁者を倒して、自由な国家を樹立しようとしていたと思われるが、奇しくも、彼自身が、それを実行する過程において、独裁者と同様に、権威に弱い人間を、自分の意のままに利用する人間であることが判明する。彼は、言われたことには、何も疑問を差し挟まず、黙って実行する性格の持ち主である職員を利用したと思っていたが、反対に、彼に利用されていたのである。ここには、2つの「発見」がある。その1つは、大学生が独裁者であることが判明することであり、もう1つは、職員が独裁者側の人物であることが判明することである。この2つの「発見」によって、理想に燃える若者であっても、独裁者とはさほど違わないものを内蔵しているということが明らかにある。

この劇を読んだ人は、おそらく、George Orwell（1903-50）の *Animal Farm*（1945）を思い出し、農場主とこの劇の軍事独裁者を、豚と大学生を重ねた人も多いことだろう。Williams が同時代人である Orwell を読んでいなかったと

は考えられない。しかし、*Animal Farm* では、いわゆる、革命は成功し、豚が農場主にとって替わって、独裁者になるが、この一幕劇では、最初は、革命家であった大学生が、一時的に、独裁者になったと思われたが、それもつかの間、最後には、独裁者側に属する職員によって、騙されていたことが判明する。*Animal Farm* に比べると、さらに、ひとひねり加えられていることがわかる。

このことは、*Animal Farm* が書かれた 1945 年当時は、独裁者は、かなり明確な形をした独裁者であり、多くの人は、誰が独裁者であるのかすぐにわかったと思われる。しかし、それからほぼ 20 年後、この一幕劇が書かれた 1966 年当時は、アメリカでは、暗殺が横行した時代であり、誰が独裁者であり、誰が独裁者でないか、独裁者が独裁者として、明確な形を取らなくなったために、その輪郭が曖昧になった時代である。多文化主義が、あちこちで、発芽し始めたこの時代、この劇のように、*Animal Farm* に、ひとひねりを加えることによって、独裁者の遍在を示そうとしたのではないだろうか。この劇を読んでいると、独裁者とは、自分以外の人間、他人でなく、「あなた自身ではないか」と問われているような気がする。この劇の読者には、「独裁者は、あなたではないか」に続いて、「あなたは、ほんとうに自分が独裁者でないと言いきれるか」、「一番先なのは、常に、自分ではないのか」、「結局は、自分が一番でなければ、気が済まないのではないか」、というような問が、次々と投げかけられてくるのではないだろうか。その意味では、この一幕劇は、ウィリアムズなりの予言の書ではないだろうか。

おわり

拙論のテキストには、New Directions 版、

Mister Paradise and Other One-Act Plays　by Tennessee Williams　Edited, with An Introduction and Notes, by Nicholas Moschovakis and David Roessel　New Directions Publishing Corporation　2005　*The Municipal Abattoir*（p157-p165）

を使用した。

注

1. *Mister Paradise and Other One-Act Plays*　by Tennessee Williams　Notes to The Individual Plays　*The Municipal Abattoir*（p237-p238）

参考文献

1. *Tom: The Unknown Tennessee Williams* by Lyle Leverich　Crown Publishers, INC　New York　1995　Chapter Eight　Dangerous Elements（1963-1969）pp253~286
2. *Tennessee Williams: Everyone else is an audience*　by Ronald Hayman　Yale University Press New Haven and London 1993　The Stoned Age（pp198~209）
3. *Tennessee Williams Memoirs*　A Howard & Wyndham Company 1976　pp180~229